

第十五回南のシナリオ大賞応募作品

オルガニストを探しに 萩 安理紗

登場人物

原	涼	今
田	子	井
(((
2	2	1
1	0	9
)))

「オルガニストを探しに」あらすじ

浮かれた大学生たちが、湘南の海で遊んでいる。そのなかの一人が今井だ。長崎県五島市から、都内の大学に進学して初めての夏休み。今井はサークルの部員と海に遊びに来ていた。彼には気になる女性がいる。サークルの先輩である涼子だ。

涼子は奇妙な虚言癖があった。自分の父親と出身地について、妙な嘘を繰り返すのだ。今井は涼子の虚言癖の下らなさを指摘してしまふ。傷ついて走り去る涼子。困惑する今井。サークルの先輩である原田は、涼子の虚言癖の原因を今井に教える。

涼子は、津波で行方不明になった父親を、空想の世界でなんとか生かそうとして嘘を重ねていたのだ。夜の浜辺で並んで座る、今井と涼子。今井は涼子のために一つの空想を語る。涼子の父は五島の教会で、パイプオルガンの演奏をしているという物語だ。夜の海が、二人の幻想を見守る。(終)

波の音。

蝉の声。

はしゃぐ人々の声。

今井「（大声で）原田さん！ ビールです」

原田「（遠くから）サークルの人数分、買こう
てきたかー？」

今井「（大声で）6缶パック、3つも買いま
したー。ぬるくなるんで、一回海から上
がってくださーい」

涼子「今井くん。そのビールはダメ」

今井「（驚いて）りよ、涼子さん。沖の方に
いると思ってました」

涼子「泳ぐの疲れちゃった」

缶ビールを開ける音。

涼子「あたしのパパ、ビール会社の社長な
の。だから他社のビール飲んじゃダメ」

ゴクゴクと飲む、喉越しの音。

今井「とか言いながら飲んでるし！」

涼子「ライバル会社のんだけど美味しいー」

今井「つてか、先週の飲み会だと父親はピアニストって言ってましたよね？」

涼子「言つてない。ダメだよー。新入部員が先輩に口答えするの」

今井「先輩なら先輩らしく、嘘ばっかつくのやめてください！」

涼子「これだから一年生は。大学生の上下関係の厳しさを分かってない！」

今井「夏は海行つて、冬はスノボするだけのサークルに厳しき必要ですか？」

涼子「…今井くんってマジレスばっか」
今井「えっ」

砂浜を歩いてくる音。

原田「泳ぎすぎて、ホンマ喉渴いたわー」

缶ビールを開ける音。

原田「東京の海ってええもんやなあ」

涼子「原田――。ココ湘南だから神奈川だよ」

原田「埼玉、千葉、神奈川は東京や！」

今井「括りが雑すぎます」

涼子「関西人って大阪南港で泳ぐのー？」

原田「涼子のアホ！ あんな汚いトコで泳
げるわけないやろ！」

涼子「大阪の人って、スグにアホって言う」

原田「東京の大学の奴はスカしとんなあ」

今井「俺たち全員、東京の大学生ですよ」

原田「ええツツコミ。今井も飲みいや」

缶ビールを開ける音。

原田「ほれ」

今井「未成年飲酒なのでダメです」

原田「買こうてくるのはええんかい」

涼子「今井くん、ちよっと真面目すぎー」

今井「九州男児は硬派なんです！」

原田「確かアレよな。自分、長崎出身やっけ？」

涼子「いいなー。毎日ちゃんぽんと皿うどんかー」

今井「毎日は食べません！」

原田「おやつはいつもカステラなんやろ？」

今井「そんなに食べません。じゃあ大阪人のおやつは毎日たこ焼きなんですか？」

原田「アホか。たこ焼きはご飯や」

涼子「えー。おやつだよー。あたしの地元
の福岡だとねえ。明太子とチーズたっぷり
入れるんだー」

今井「：：涼子さん」

涼子「なに？」

今井「この間、東京生まれ東京育ちのシテ
イーガールって言ってましたよね？」

涼子「うそーん」

今井「山手線内側育ちって言ってました」

涼子「そうだったけ？」

今井「その前はロサンゼルス出身の帰国子
女って自慢してました」

涼子「記憶にないない」

今井「何でそんな下らないことばかりで嘘
つくんですか？ みっともない」

大きな波の音。

涼子「（不機嫌に）……下らないことなら、
嘘ついたっていいでしょ」

今井「（驚いて）……え？」

原田「（慌てて）おい、涼子」

涼子「疲れたから、ホテル帰って休むね」

今井「あの、え、その」

涼子「ビールありがと。今井くん」

砂浜を走り去っていく音。

今井「（大声で）涼子さん！」

原田「ええ、ええ。ほっといてやれ」

今井「でも」

原田「涼子のホラ吹きも大概やしな。ゴメンな。嫌な思いさして」

今井「その、涼子さん、なんで」

原田「……またあとで話すわ。(大声で)お

しい！ 泳いでる奴ら！ ビールぬる

なるぞ！ はよ取りに來い！」

コオロギとスズムシの声。

静かに打ち寄せる波。

砂浜を歩いてくる音。

今井「……涼子さん」

涼子「あ、今井くん……」

今井「ずっと浜辺に座って、夜の海眺めてたんですか？」

涼子「いい景色でしょ。隣座る？ どうぞ」

今井「……失礼します」

砂浜に座る音。

涼子「あたし達、カップルみたいー（笑う）」

今井「あの、すみませんでした」

涼子「何が？」

今井「その、昼間のこと」

涼子「ああ……」

今井「俺、色々知らなくて」

涼子「（遮って）原田に聞いたの？」

今井「……はい」

涼子「あのお喋り野郎めー。聞かされても

困るよね」

今井「そんなこと」

涼子「あたしが宮城出身でさ。パパが震災の津波で行方不明のままだなんて」

今井「……ホントにすみません」

涼子「なんでそっちが謝るの？ 悪いのは

嘘つきのあたしだもん。……ゴメンね」

今井「涼子さん……」

涼子「みんな、そんな顔になっちゃうんだ。

本当のことを知ると」

今井「今の俺の顔？」

涼子「うん。その傷ついた顔。真実は人を傷つけるよね。嘘の方がマシ」

今井「……優しいんですね」

涼子「ぜーんぜん。逆。あたしが周りの優しさに甘えてんの。原田やサークルのみんなを、下らない嘘に付き合わせてる」

今井「下らなくないです」

涼子「……下らないよ」

風が吹く音。

涼子「他人を騙し通す気もない、コロコロ変わる嘘はダメなんだよ」

今井「ダメだとしても、俺は涼子さんの嘘、嫌いじゃないです」

涼子「なんで？」
今井「うーん。なんかキラキラしてて」

涼子「多分、それ、あたしの希望がつまってるから。自分の出身地やパパの職業に」

今井「希望かぁ」

涼子「頭の片隅のどっかで思ってたの。パパはまだ生きてるって。だって遺体、見つかってないんだよ？」

遅いかかる津波の音。

涼子「大きな大きな津波に飲まれて」

嵐でうねる海の音。

涼子「嵐の海に投げ出されても」

男性が息継ぎを繰り返し、泳ぐ音。

涼子「パパは必死に泳いで」

男性が激しく呼吸をする。
海から浜辺に上がる水音。

涼子「どこかの陸にたどり着くの」

今井「それって東京や福岡やロサンゼルス？」

涼子「そう！　そして」

ピアノのメロディ。

涼子「得意だったピアノか」

ビールをグラスに注ぐ音。

涼子「好きだったビールを極めて」

今井・涼子「ピアニストかビール会社の社長になってる！」

涼子「（笑う）」

今井「（笑う）」

涼子「もう一度この世界でママと巡り合つて、また私が生まれてるの」

今井「地球上のどこかで、3人が幸せに暮らしてるんですね」

涼子「SFっぽい馬鹿な妄想かな？」

今井「妄想なんかじゃないと思います」

涼子「……どうして？」

今井「だって『ありえない』だなんて、誰にも言えないじゃないですか」

涼子「今井くん……」

今井「涼子さんは自分のことを嘘つきだつて言ってるけど、俺は違うと思います」

涼子「そうかな」

今井「考えつくだけの可能性を、話しているだけです。きっと」

涼子「（ゆっくりと）かのうせい」

静かな波の音。

今井「俺にも一つの可能性が見えました」

男性が息継ぎを繰り返し、泳ぐ音。

今井「必死に海を泳ぎ続けた涼子さんのパパは、ある島に辿り着いたんです」

涼子「どこ？」

今井「長崎県の五島列島。小さな島が沢山並んでいて、そのうちの一つが俺のふるさとです」

涼子「（笑って）毎日カステラは食べない島？」

今井「（笑って）たまには食べます」

涼子「それでパパは？　どうなったの？」

今井「ある楽器に出会い、魅了されました」

パイプオルガンの重音。

今井「パイプオルガンです。五島の各島には教会があって、弾き手が不足しているパイプオルガンがいくつか存在しています」

パイプオルガンがド、ミ、ソと鳴る。

今井「涼子さんのパパは、ピアノの技術を

活かして、あつという間にオルガンの演奏をマスターしました」

パイプオルガンの短いメロディ。

今井「今では立派なオルガン奏者です」

パイプオルガンのミサ曲。

今井「色々な島の教会に呼ばれ、ミサや結婚式のために音を奏でています」

教会の鐘の音。

今井「結婚式の鐘の音を聞くたび、涼子さんのパパは思います」

パイプオルガンが奏でる、ワーグナー『結婚行進曲』の冒頭。

今井「『涼子の結婚式では俺が演奏するんだ』と」

涼子「……パパ」

今井「これが俺に見えた一つの可能性です」

涼子「……聞いてみたいな。パパの演奏」

今井「……俺も」

涼子「パパは五島列島のどこかにいるかもしれないんだね」

今井「はい」

涼子「……連れてってくれる？　いつかさ

こに。パパを探しに」

今井「もちろん」

涼子「もし、見つけられなかったら？」

今井「何年でも一緒に探します」

涼子「……言ったね？」

今井「（笑う）」

静かに打ち寄せる波の音。

（終）